図書館だより

目　次

素敵なライブラリアン　――坂本　清恵　1
著作紹介　佐々木雄大著『バタイユ：エコノミーと贈与』　――佐々木雄大　2
著作紹介　川端有子著『小説家　フランシス・ホジソン・バーネット』　――川端　有子　3
ケルムスコット・プレス版スウィンバーン『カリュドンのアタランタ―悲劇』　――川端　康雄　4
西生田保存書庫の現状　――浜口　都紀・飯山　智子　6
2023年度夏期スクーリング開館について　――南木　香織　8

コロンビア大学の旧図書館

素敵なライブラリアン

坂本　清恵

関東大震災から100年ということで，関連する記事が数多く報じられています。東京出身の親族が少ないこともあり，大震災を体験した方から直接お話をうかがう機会はごく稀でしたが，日本女子大学に着任し２年目の2008年の春休み，ニューヨークに一月ほど滞在し，コロンビア大学のドナルド・キーンセンターで講演する機会に恵まれた折に，奇しくも大震災体験者にお目にかかり，お話をする機会がありました。

その方は甲斐美和さんという，コロンビア大学のライブラリアンだった方です。アメリカでお生まれになった甲斐さんは，日本に滞在中，兄上と昼食を摂るために外出，赤坂見附付近で大震災に遭遇したとのことでした。地面が大きく揺れ、たいそう驚いたそうです。お話をうかがった時点ですでに90歳を超えていらした甲斐さんにとって，それは人生のごく一瞬，一齣の体験であったように伺いました。

甲斐さんは，若いころピアニストとして活躍され、1937年にワルシャワで開催された第３回ショパンコンクールに参加されたことなどをうかがいました。ピアニストとして活躍された方が，なぜライブラリアンになられたのでしょう。第二次世界大戦がはじまり，アメリカで収容所に収容された甲斐さんは，コロンビア大学中央図書館のタイピストに採用されたことにより，解放されたのでした。その後，同大学の東亜図書館で，角田柳作選書の図書目録の作成など，手腕を振るわれたそうです。日本からコロンビア大学を訪問する研究者のお世話をされ，お目にかかった時も，ハーレムを見下ろす絶景のロケーションの，大学の「FACULTY HOUSE」食堂にお連れいただき，バーボンをぐいぐい召しあがりながら，お話してくださいました。定年後も，コロンビア大学の重要なフェローとして，大切に扱われている様子が印象的でした。

海外で活躍する日本人ライブラリアンにお目にかかるたびに思うのは，その高い見識が認められ，研究者と同等に扱われていることです。時に，所属大学間を異動したとのご挨拶を，いただくこともあります。日本では，図書館司書のエキスパートが，図書館学の講義を担当することはありますが，なかなかアメリカまでには至っていないことが，いささか残念です。本学でも，図書館勤務の専任職員の方々は，司書の資格と高い知識とをお持ちです。これから，大いにご活躍いただきたいと，願っています。

（図書館長・日本文学科教授）

著作紹介

佐々木雄大著『バタイユ：エコノミーと贈与』

佐々木　雄大

〈役に立つ〉とは何でしょうか。「スマホは便利だ」「それを勉強して何の役に立つのか」「社会的有用性の高い仕事だ」等々，私たちは日々，役に立つことを考え，有用性をあらゆるものごとの判断基準としています。実際，役に立つ事物がなければ，私たちは勉強も仕事もできませんし，ご飯を食べることすらできません。ですから，〈役に立つ〉は，私たちが生きていくためにきわめて重要です。しかし他方で，私たちは必ずしも役に立つことばかりをしているわけではありません。無益な遊びに熱中したり，余暇を無為に過ごしたり，自分を犠牲にして他人を助けることさえします。その意味で，人間は役に立たないこともしてしまう存在なのです。ですから，人間の生の全体を捉えようとするとき，役に立たないことについても考えなければなりません。では，そもそも〈役に立つ〉とはどのようなことでしょうか。それは人生にとってどのような意味をもつのでしょうか。本書は，バタイユの思想をエコノミーという観点から検討することを通じて，〈役に立つ〉について徹底的に思考するものです。

ジョルジュ･バタイユ（1897-1962）は20世紀フランスの文学者･思想家で，一般的には，『眼球譚』や『マダム・エドワルダ』といったエロティックな小説で知られています。他方で，エロティシズムや消尽，贈与，聖なるもの等をめぐる独特の思想を展開し，合理性・有用性を重視する現代社会を鋭く批判しました。その思想は，フーコーやデリダ，アガンベンといった現代の哲学者たちに大きな影響を与えています。このバタイユの思想の中心的な概念のひとつに「エコノミー」があります。

エコノミー（economy）は通常，「経済」と訳されます。しかし，この語は元々，経済という意味ではありませんでした。それは語源的には，古代ギリシア語で「家政」を意味するオイコノミア（οἰκονομία）へと遡ることができます（ですから，本学の家政経済学科は語源的にはエコノミー・エコノミー学科です）。やがてラテン語に翻訳され，キリスト教神学では，神による世界の「配置」（dispositio）や「配剤」（dispensatio）といった意味をもちました。さらに近代では，自然や動物，道徳，政治といった様々な分野における有機的なシステムを指すようになりました。そして，「政治のエコノミー」（political economy）が現代の「経済」へと繋がっていきます。このように，エコノミーという概念は，西洋思想史において，多層的な意味を担わされてきたのです。本書では，多様なエコノミー概念に通底する意味を〈役に立つ〉に見定め，その思想的系譜のうちにバタイユのエコノミーを位置づけ，その意義を明らかにしていきます。

バタイユは，生産的なものしか考察対象としない，通常の意味での経済学を「限定エコノミー」と呼び，これに対して，非生産的な営み（役に立たないもの）までをも考慮に入れる学問として「一般エコノミー」を提唱します。非生産的なものの例として，奢侈，浪費，蕩尽，供犠などが挙げられますが，その最も純粋な形に「贈与」があります。（ギブアンドテイクのような互酬的な贈与交換ではなく）一方的に与えるだけの無償の贈与は，見返りも計算もなく行われるのですから，何の役にも立ちません。それにもかかわらず，私たちはしばしばそうした贈与をしてしまいます。例えば，親から子への愛は見返りを求めない贈与であるといえるでしょう。言葉もまた，どこからともなく与えられ，誰が受け取るあてもなく贈られていく，そうした贈与であるといえるかもしれません。

本書が言葉の贈り物となって，読んだ人に〈役に立つ〉について立ち止まって考えるきっかけを与えるとすれば，著者としてはこれほど嬉しいことはありません。　（国際文化学科講師）

2021年10月　講談社発行　362頁　＊図書館目白所蔵，請求記号950.278-Bat

著作紹介

川端有子著『小説家　フランシス・ホジソン・バーネット』 ―現代にも通じる女性のキャリアの葛藤―

川端　有子

19世紀末のイギリスとアメリカ両国で，もっとも人気がある流行作家だったフランシス・ホジソン・バーネットは，150年後，自分が３冊の子ども向けの本の作者としてのみ知られることになろうとは，思いもよらなかったことであろう。

イギリスに生まれ，アメリカで育ち，その両方を内からも外からも知り抜いて，たくみにそのお国ぶりを使い分け，大西洋両岸の読者の心をわしづかみにしたこの作家は，生涯大人のための小説を70編あまり，子どものための小説を４冊とその他の短編を書いて，文字通り自分のペンのみで，その生活を築き上げた。

初めて雑誌に投稿したのは18歳の時で，編集者には「わたしの目的は報酬です」と宣言した，したたかなプロ意識。そののちまるで原稿製造機械のごとく書いて書いて書き続け，その原稿は，長すぎるという以外の理由では，一度も断られることがなかった。ペンで身を立てる女性作家は数多くいたが，ほとんど教育らしい教育は受けず，また知的な環境に生まれ育ったわけでもなくて，ただただあふれるばかりの想像力と創造力を，次々に現金に換えていった女性は他に見当たらない。

ロンドンとワシントンに豪邸を構え，夏には海辺の避暑地で過ごし，フランスやイタリアに外遊し，生涯に33回大西洋を渡るという生活ぶりは，常に新聞や雑誌に書きたてられた。美しいドレスを愛して身を飾り，二人の息子には紳士教育を受けさせようと奔走し，自分が描く物語の主人公さながらに，より高い社会的な身分にのし上がっていくことを夢見ていた。

しかし，自らが描くロマンス小説が，幸せな結婚で終わるのとは裏腹に，現実の伴侶には恵まれず，若くしてアメリカ人の医者とほとんど迫られるように結婚し，二児を儲けるも疎遠になり，彼との離婚後二年で，10歳年下のイギリス人の医者と再婚した。だがすぐに彼の暴力のせいで逃げだすように別れ，彼女はついにアメリカの国籍を取得しイギリスとは縁を切った。

深く愛した長男を16歳で失い，埋め合わせをするかのように恵まれない子どもたちのために慈善事業にのめり込んだ。次男をモデルに書いた小説があまり爆発的に売れたため，次男は死ぬまでその作品に付きまとわれ，運命を左右された。息子たちへの愛と義務感，母であり妻であることと職業人としてのキャリアの板挟みにされた彼女の苦悩は，たとえ彼女が乳母を雇いコックを使う立場の人間であったとしても，現代を生きる我々にも通じるものがある。

社交好きで明るくウィットにとんだ会話を楽しみ，もてなし好きのホステスであった反面，過労とストレスから頭痛に悩まされ，時にはひどい抑うつ状態に陥って，何週間もベッドから起き上がれないこともあった。息子を失ったトラウマは癒されることなく，その心を唯一晴らすことができたのは庭作りで，土をいじり，バラを育てて，時代を超えて読み継がれる傑作を著したが，この本の評価が認められるのは死後のことであった。

経済的自立の有無や，結婚，出産と子育ての葛藤，DV という言葉がまだなかった時代にその危機を乗り越え，消費社会のもたらすきりもない誘惑と欲望のいたちごっこに命をすり減らしていった人生だった。『小公子』，『小公女』，『秘密の花園』の背後にあったバーネットの生涯には，今でも女性を悩ませる葛藤と達成感，苦悩と喜びが垣間見られるのである。　（児童学科教授）

2021年６月　玉川大学出版部発行　159頁　＊図書館目白所蔵，　請求記号930.278-Bur

ケルムスコット・プレス版スウィンバーン『カリュドンのアタランタ――悲劇』

川端　康雄

前回のダンテ・ゲイブリエル・ロセッティに引き続き，モリスの同時代人で親交があった詩人のケルムスコット・プレス（以下，KP とも略記する）刊本を今号でも取り上げたい。詩人アルジャーノン・チャールズ・スウィンバーン（1837-1909）の『カリュドンのアタランタ――悲劇』（KP25）がそれである（以下『アタランタ』とも略記する）。

スウィンバーンはモリスより 3 歳下で，イートン校を経てオクスフォード大学ベイリアル・コレッジに入学したのが1856年秋のこと。翌1857年夏にロセッティが組織して行ったオクスフォード大学学生会館の壁画制作の場にスウィンバーンは立ち会っていた。画家として参加していたわけではなかったが，かねてからロセッティを敬愛し，この期間にロセッティと陽気な仲間たちの祝祭的な雰囲気を共有していた。モリス，バーン=ジョーンズとの友情が深まったのもこの時のことで，バーン=ジョーンズは後年スウィンバーンの詩から絵画の着想を得て代表作のひとつ《ラウス・ウェネリス（ヴィーナス讃歌）》（1873-78）を描いている。

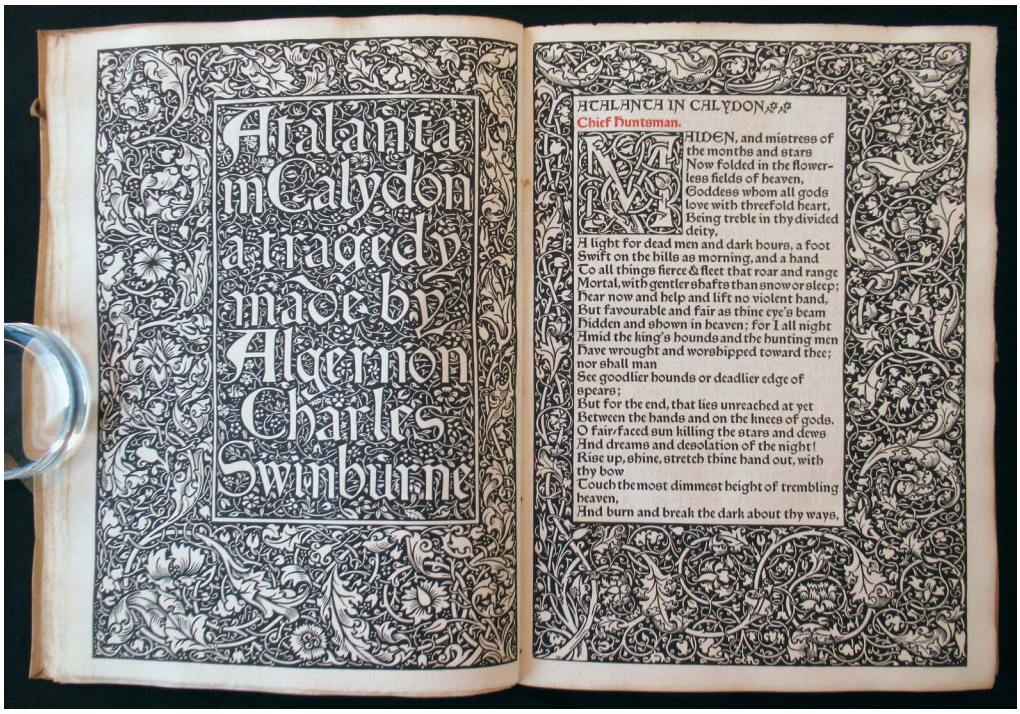
この詩人はアルコール依存症に加え，アルゴラグニー（苦痛嗜愛）の性癖があり，40歳前半で心身衰弱に陥り，1879年以後は友人で作家のシオドア・ウォッツ=ダントン（1832-1914）に庇護されてサリー州パトニー（現在はロンドン市内）のウォッツ=ダントン邸で残りの生涯を送った。KP 版『アタランタ』出版の相談でウォッツ=ダントン宛のモリス書簡が数通残っているのはそのためである。社会主義運動に精力的に取り組んでいた1883年にモリスはスウィンバーンに社会民主同盟への加入を勧めたが，それを固辞されている。二人はそう親密な間柄というわけではなかったが，生涯にわたって互いに敬意を払い，著作を送り合い，手紙のやり取りをしていた。

「ラファエル前派」は，本来の意味では，1848年に結成されて1850年代の初頭までの数年間に活動したロセッティ，ジョン・エヴァレット・ミレイ，ホルマン・ハントら前衛的画家集団を指す。だがその意味範囲が拡大されて，彼らの影響を受けた後続世代の画家を含むのみならず，19世紀後半の英国の文学的潮流を指示する語としても流通するようになった。後者の意味での「ラファエル前派詩人」の代表格がロセッティであり，モリスであり，そしてスウィンバーンだった。20世紀前半のモダニズム興隆にともない，評価は下がったのだが（といっても，20世紀半ばでも吉田健一のようにスウィンバーンの愛読者はいた），近年再評価されている詩人のひとりといってよいだろう。

『アタランタ』はスウィンバーン29歳で世に問うた作品で，ギリシア神話を素材にして，ギリシア悲劇の形式を用いた詩劇である。これは彼の出世作であるのと同時に代表作ともみなされている。ちなみに『アタランタ』の初版（ロンドン，エドワード・モクソン，1865年）の表紙の装丁はロセッティが手掛けている。同時期にギリシア神話に取材した韻文物語を多く発表したモリスにとっても思い出深い作品であったことは想像に難くない。筋書きはこうだ。カリュドンのオイネオス王とその妻アルタイアのあいだにメレアグロスが生まれる。その誕生時に運命の女神が母アルタイアの前に現れて，いま燃えている薪が燃え尽きるときに息子は死ぬことになると予告した。母はその薪の火を消して秘匿する。メレアグロスが逞しい青年に成長したころ，父オイネオス王が狩猟の女神アルテミスに敬意を払うのを怠ったため女神はそれを恨んでカリュドンの野に一頭の獰猛な大猪を放つ。その退治に駆り出された勇者たちが次々と失敗するなか，俊足の狩人である乙女アタランタ（アタランテー）の矢が猪に命中し，それをメレアグロスが仕留める。アタランタに魅せられた王子が戦利品（猪の頭部）を彼女に進呈すると，それを不満として乙女を貶める男たちと争いになり，王子は叔父二人を殺害。母アルタイアは兄弟の仇を打つために隠してあった呪いの薪を取りだして燃やす。これでメレアグロスの寿命が文字どおり燃え尽きる。母も悲嘆のあまり間もなく命を落とす。

『アタランタ』の書誌データは以下のとおり。

KP 書目第25番『カリュドンのアタランタ――悲劇』（*Atalanta in Calydon: A Tragedy*）アル



チャールズ・A・スウィンバーン著『カリュドンのアタランタ』（ケルムスコット・プレス，1894年）の見開き２頁。活字（トロイ・タイプ），ボーダー，装飾頭文字のデザインはウィリアム・モリスの手になる（所蔵：日本女子大学図書館）

ジャーノン・チャールズ・スウィンバーン著。大型４折判（289×210mm），92頁。トロイ・タイプ（題扉の標題，本文），チョーサー・タイプ（解説と人物名），ゴールデン・タイプ（題辞出典）。ギリシア語書体はセルフウィン・イミッジがデザインした活字を使用。２色刷。木口木版題扉付。軟ヴェラム装，絹紐付。紙刷本250部（２ギニー）。ヴェラム刷本８部（12ギニー）。コロフォン日付1894年５月４日。KP より1894年７月24日発売。

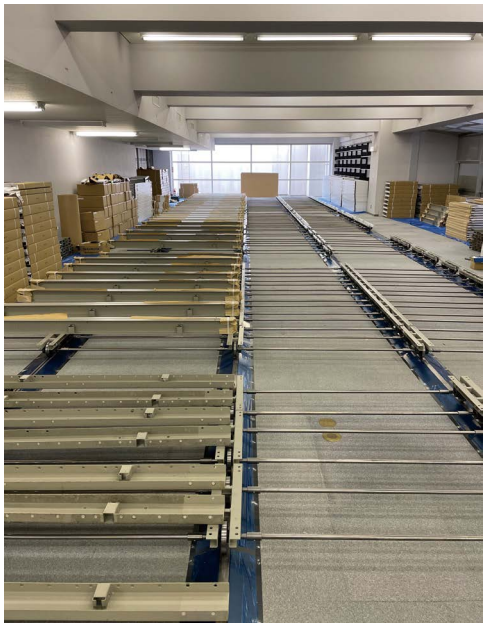
上記のように，本書のなかにはギリシア文字が使われている。タイトルページに題字としてエウリピデスの散逸した悲劇『メレアグロス』の断片（「生きている者に善を為せ。人は誰も死なば土となり影となるゆえ。無は無へと沈む」），登場人物表の下にもうひとつの題辞としてアイスキュロスの『コエーポロイ』中のメレアグロスの「呪いの薪」の挿話を語った詩行（602-11行），そして初版刊行の前年に没した詩人ウォルター・サヴェッジ・ランダー（1775-1864）に捧げられた古典ギリシア語によるスウィンバーン自身の詩２篇（それぞれ20行と14行）がギリシア文字で印刷されている。KP 本で使用した英文活字体３種はすべてモリスのデザインだったのだが，ギリシア文字はセルウィン・イミッジ（1849-1930）がデザインした活字体をマクミラン社の許可を得て使用した。これはすべて大文字で，アクセント記号を使わずに組まれている。

完成後モリスは著者に３冊（１冊はモリスの署名入りで）進呈した。また印税として62ポンド10シリングの小切手をモリスみずから著者に送っている。スウィンバーンは礼状を出し，「貴兄の類まれな印刷所で出された書物のうちでも最高に美しい部類に入ります」と称賛した。

日本女子大学所蔵版『アタランタ』の見返し上部には “Sydney P. Waterlow / Aug. 5, 1895” という書名と日付が手書きで記されている。長じて外交官となったシドニー・フィリップ・ウォーターロー（1878-44）のことで，1895年にはイートン校に在学していた。親からプレゼントされて最初の所蔵者になったということだろうか。この人物の手になると思われるが，同時期にギリシア語と英語の韻文を手書きで記した紙葉が４枚，見返しに貼り付けられている。　（文学部名誉教授）

西生田保存書庫の現状

2021（令和３）年度の人間社会学部の目白キャンパスへの統合に伴い，西生田図書館は2020（令和２）年度末で閉館した。2021（令和３）年４月以降は保存書庫としての運用を開始している。その現状を報告する。



１階書架撤去後の集密書架用レール設置作業

2021年２月に，西生田図書館から目白の図書館（2019（令和元）年４月に新築）へ蔵書移動作業を行ったが，その収容量不足のため資料すべては移動できなかった。そのため一般図書は和書１（哲学）・３（社会科学）・７門（芸術・美術）・490（医学）のうち目白図書館所蔵図書と重複していない（複本でない）もの，洋書１（哲学および心理学）・３（社会科学）・７門（芸術）すべて，および教員より個別に希望があった和洋図書を移動対象とした。大型本は和洋ともすべての図書，雑誌は継続しているタイトルの最新３年分のみを移動した。西生田図書館に残ったのは，図書は目白に動かせなかった部門すべてと移動した部門の図書の複本，雑誌は継続タイトルのバックナンバーと継続していないタイトルすべてである。特殊資料については，和装本・貴重書はすべて目白図書館へ移動，マイクロ資料・ビデオはすべて西生田図書館に残し，CR-ROM 等は個別に判断した。

残された資料の一部は目白の蔵書との複本で，除籍作業が必要となる。キャンパス統合後，西生田図書館は図書館としてではなく保存書庫としての役割を維持していくことになり，名称も2021年４月より正式に「西生田保存書庫」と変更された。利用者が直接立ち入ることはできないが，週に５回便が設定されており，必要な資料は目白キャンパスに取り寄せて利用できる。

保存書庫としての運用を始めるに際し，これまで閲覧のために使われていたスペースを書架に変更する必要が生じた。まず第１期工事として2021年の夏，１階の閲覧机，キャレル（個席），視聴覚ブース等を撤去，更に和雑誌が配架されていた固定書架も撤去，空いたスペースに手動で開閉する集密書架を設置することが決まった。固定書架を撤去するため，ここに残っていた和雑誌を退避させなければならず，２～４階の目白への図書移転により空いた書架に一時的な移動を行った。

１階の工事を急がなければならなかったのには事情がある。目白の旧図書館から新図書館への移転が行われる際，外部倉庫に委託した3500箱の資料の委託予算が年度内で終了するため，なるべく早いタイミングでこれらの資料を学内に戻す必要があったのである。幸い１階に集密書架を設置し

完成した集密書架と資料の入った箱（１階）

たことでかなりの余裕が生まれており，配置計画の立案は比較的スムーズに行うことができた。箱を開けて中の資料を並べなおす時間的余裕はなかったが，集密書架の棚が倉庫に預けていた箱をぎりぎり収められる高さだったことも幸いした。集密書架内では通路が限られるため，同じブロック内での並行作業ができないという制約があったものの，委託していた業者により９月27日から30日の４日間で予定通り返送作業が完了，戻ってきた資料はひとまず箱のまま新しい集密書架に収められた。引き続き，書架増設のために他の階に移動した資料を元の階に戻し，一部の資料を箱から取り出して配列し直す作業が続けられた。

４階の増設書架

更に，2022（令和４）年の２月には２～４階の書架増設作業が行われた。こちらには，９月に戻ってきたのとは別に，目白と西生田から別々に外部委託されていた計3000箱が戻ってくることになる。地上階ではかつてキャレルが並んでいた窓際や，閲覧机が置かれていたスペースなどの小さな隙間に少しずつ書架を増設しており，既設書架には多くの資料が残っていることから，１階とは異なるかなり複雑な配列を行うことになった。なんとかぎりぎり収めたものの，配列作業に必要なまとまった空きは確保できず，今後複本の除籍を進めていく中で捻出していくことになる。

西生田キャンパス中庭の河津桜（2023年３月撮影）

現在，目白・西生田の両図書館から外部倉庫に委託していた資料は全て西生田保存書庫に戻ってきているが，ほとんどの場合一つの箱の中には図書や雑誌，和洋様々な資料が混在しているため，開封にはかなりの手間がかかる。更に，利用に支障がでないよう「この資料が現在どこにあるか」が確実にOPACでわかるようにしておかなければならないという条件もあり，データの修正を開封と同時に行わなければならない。一元的な配列が実現するまでにはまだまだ時間がかかることが予想される。

外部倉庫から戻った一部の資料について，OPACでの所蔵表示が目白所属になったままのものがあるが，箱から取り出して配列する時点で順次「西生田保存書庫」に変更していくので，わかりづらいとは思うがデータが整備されるまでもうしばらくお待ちいただきたい。

目白図書館の書架にも余裕があるわけではなく，近い将来には一部資料の西生田への移管を計画していく必要がある。そのためにも，なるべく除籍と配列を早く完了させるべく日々作業を進めているところである。

（図書館事務部長 浜口都紀，図書館課長 飯山智子）

2023年度夏期スクーリング開館について

2023年度は，限定開館が解除されて初めての夏期スクーリングとなった。前年度に引き続き，対面授業・遠隔授業のハイブリット型の夏期スクーリングであるが，図書館では昨年度に比べ複数人での利用が増え，まとまって学習する姿もあり，少しずつ夏期スクーリングの風景が戻ってきたように感じられた。夏期スクーリング開館は，７月31日（月）～８月30日（水）の27日間，７月31日は通学課程定期試験最終日であったため21：00閉館となったが，その他の日程は平日8：45～20：00，土8：45～18：00の開館時間であった。教室と図書館の立地が離れているせいか，利用時間帯としては昼休みと最終時限終了後に集中し，今後もこの傾向が続くと思われる。

図書館内での Wi-Fi の利用方法や，PC へのログイン方法等は，例年に比べ質問も少なく，機器の利用に慣れている様子が見受けられた。一方で，図書の探し方が分からない，利用した図書を元の位置に戻せない等，館内の利用については不慣れな印象を受けた。ネット検索も便利だが，テーマを掘り下げたい場合には図書資料が欠かせないため，OPAC 検索や館内にある利用案内をみながら，色々な資料に出会っていただきたい。

今年も JWU ラーニング・コモンズさくらで行われた授業があり，図書館を利用した調べ学習の様子に，通りかかった学生が興味深そうに眼をやる様子があり，よい刺激になったのではないかと思う。

図書館の閲覧席は，集中して読書や学習ができるよう静かな環境を整えているが，JWU ラーニング・コモンズはお互いの意見を交換するなど発声してもよい学習環境として提供している。しかし，オープンスペースを複数人で利用することになるため，お互いが気分よく学習できるよう，気づかいを忘れずに利用していただきたい。また，館内でのマナーについてもご協力をお願いできればと思う。

（館員･閲覧･西生田保存書庫係　南木香織）

夏期スクーリング開館の利用状況

年度	2023	2022	2021
開　館　日　数	27	24	24
入　館　者　数	2638	2,021	1,663
１日平均	97.7	84.2	69.3
最　　高	201	164	95
最　　低	54	28	35
受　講　者　数	1945	1,814	785
登　録　者　数	102	131	79
１日平均	3.8	5.5	3.3
更新者数	63	65	27
来館率	8.5	10.8	13.5
貸出冊数(通信生)	247	346	210
１日平均	9.2	14.5	8.8
最　　高	23	45	31
最　　低	0	0	0
内郵送貸出冊数	0	0	0
1日平均	0	0	0
最高	0	0	0
最低	0	0	0
貸　出　日　数	27	24	24
複　写　枚　数	3269	3,239	1,724
１日平均	121.1	135	71.9
一般学生・教職員その他の貸出	1,174	1,103	1,130
１日平均	43.5	46	47.1
内郵送貸出冊数	6	42	97
1日平均	0.3	1.8	4.1

注：受講数：2021年度までは実人数であるが，2022年度より延べ人数での算出となった。

参考係利用状況（質問処理件数）

年度（日数）	2023(27)	2022(24)	2021(24)
一般学生・教職員	38	32	40
スクーリング生・その他	23	18	4
合　計	61	50	44
１日平均	2.3	2.1	1.9

編集後記　キャンパス統合から２年半余り，西生田保存書庫の現状を報告した。著作紹介は２点。専門書ながら平易な紹介文により哲学とは抽象的な学問にのみあらずと再認識。『小公女』のバーネットが“児童文学”のみの作家でないことを初めて知る。ケルムスコット・プレス紹介ではかつての所有者の書き付けからの分析が興味深い。館長の巻頭言からはエールをいただいた。今号もご執筆の先生方に感謝申し上げる。

2023年度編集委員：飯山智子．水嶋寿恵．南木香織　　（飯山）

日本女子大学図書館だより　No.178　2023.11.30　　ホームページ https://lib.jwu.ac.jp/lib/LP.html
日本女子大学図書館発行　〒112-8681　東京都文京区目白台２丁目８番１号　☎（03）5981-3195